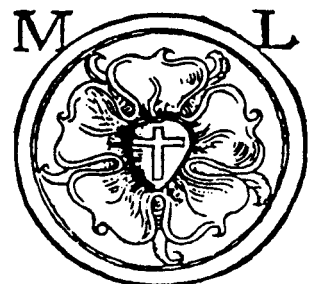


ルター 新聞

Die Luther Zeitungs

ルーテル学院大学 (日本ルーテル神学校) ルター研究所ニュース・Nr.72



ルターと聖書



A.Traini 画 "The Life of Martin Luther"
(アメリカで500年を記念して出版されたとびだす絵本)

日本聖書協会から、昨二月、三一年ぶりに聖書の新しい翻訳が出版された(聖書協会共同訳)。

言うまでもなく、宗教改革運動はルターと聖書との出会いから始まった。聖書の精読、真剣勝負。その格闘の中で、彼は「恵みの神(神の義)」を再発見した(塔の体験)。そして、こうした聖書精読から、彼は「神の言葉」としての説教を語り続けたのである。

またルターの大きな仕事の一つは、聖書のドイツ語訳である。民衆一人ひとりに、聖書が生きた言葉として読めるようになった。

そして、ルターと言えば、その神学のキャッチフレーズは「聖書のみ(ソラ・スクリプトゥラ)」である。聖書がとても大事な書物であることはわかるが、しかし「聖書のみ」の真意は何か。

新しい聖書翻訳が出版された今年は、改めて「ルターと聖書」について考えること、そして聖書をじっくり読む、よいチャンスではなからうか。(え)

今号の内容

- 2面 ルターと聖書
- 3面 二〇八年 秋の講演会 報告
「ルターと聖書」
～私の研究ノートから～①
- 4面 シリーズ「人間ルター」⑩
翻訳する人ルター
ルターこぼれ話
ー ルターとキケロ
- 5面 ルター研究者・名著シリーズ
ー フラジルの神学者
V・ウェッセレ
ルターのことば
- 6面 私のルター研究ー「福音」を問う
「切手にみるルター」⑧
緊急通貨のルター
- 7面 本の紹介
ルター研究所
「ルター研究」別冊5号
江口再起「ルターの脱構築」
- 8面 ルター研究所の助手を
させていただいて
研究所ニュース

ルターと聖書

所員 立山 忠浩

宗教改革は一五二七年一〇月三十一日に始まった。しかしルター自身の改革はそれ以前に起こっていた。内的な改革、信仰の改革である。修道院に入り、司祭となることで信仰が確立し、その信仰が死への恐れや様々な不安から解放するはずだったが、そうではなかった。しかし転機が訪れた。新設のヴィッテンベルク大学の聖書教授になった時、宗教改革の五年前のことである。

この時からルターの聖書の本格的な取り組みが始まった。講義のための準備が自身の信仰の改革を促進することになる。これは「塔の体験」と呼ばれるが、塔のあった狭い部屋が祈りと研究の場だったからである。そこで詩編、ローマ書、ガラテヤ書などの講義のための準備を行い、自分自身が福音的な信仰を見出すことになった。

私自身のことであるが、学生時代に教会に通い始めたころに、岸千年先生が特別伝道の講師として招かれた。先生は、ルターの子信仰の改革を、サルの子信仰から猫の子信仰への転換と称された。サルの子は自分の力で母親にしがみつくこと

で安全を確保するが、猫の子はそんなこととはしない。母親が首根っこを掴んで安全なところへ運んでくれることを知っているからである。他力である。修道院での修行や祈り三昧の生活を自らの努力で実行して救いを獲得するサルの子信仰（自力信仰）から、そんなことはせずとも、神の恵みによって救いが与えられることを信じることで救いを獲得する猫の子信仰（他力信仰）への改革である。この信仰を、ルターは詩編から啓発され、ローマ書、ガラテヤ書というパウロの手紙から確立した。一五二七年にはすでに、ルターの子信仰の改革は揺るぎないものとなっていたのである。聖書を通して、特にパウロの手紙を通してルター自身の子信仰の改革がまず起こり、それが宗教改革へと全面に展開されたのである。

ルターの子信仰から他力信仰へとという信仰の改革は、「信仰によって義とされる」（いわゆる信仰義認）というルター派の標語にもなった。しかしよく考えてみよう。「信仰義認」と言うときの「信仰」とはいったい誰の信仰であるのか。読んで字のごとくで、「信じ、仰

ぐ」ということから「私たちの信仰」であることは明瞭である。そこから延いては、義認の根拠は「私たちの信仰」となってしまい兼ねない。つまり、その人の信仰次第ということになってしまい、「自力信仰」とどこが違うのかという曖昧さが拭えない。その曖昧さを払拭するためにルター派の神学者たちは様々な表現を用いて来た。「恵みのみ」、「受動的な信仰」、「恩寵義認」などである。

しかし聖書の翻訳の言葉に、特にパウロの手紙に、この曖昧さの根源があることを指摘した神学者たちがいた。古くはカール・バルトがローマ書の注解において、通常は「信仰」と訳されていた言葉の一部を「信実」と訳したことが想起されるが、現代の日本においても少数派であるが、「信仰」は「信」（太田修司、田川建三）、「まこと」（小川修）と訳すべき場合があることを指摘して来た。これらの主張の意図は、私たち人間の信仰とは異なる、いやそれよりもっと重要で、根源的なものがあるということである。小川はそれを「神のまこと」と呼んだ。

さて、この度『聖書協会共同訳』が刊行されたので、早速「信仰」がどう訳されているのかを調べてみて驚いた。従来「イエス・キリストを信じることにより」が「イエス・キリストの真実によって」（ローマ三・二三）と訳されている。この改訳によって、義認の第一の根拠が

「私たちの信仰」ではなく、「キリストの真実」ということが明瞭になった。画期的なことである。そして今度は私たちルター派が問われることになった。旗印である「信仰義認」の「信仰」をルターは、そしてルター派はどう理解していたのか。「聖書のみ」、「信仰のみ」を当然のように強調して来た私たちは、この意味を問い直す絶好の機会が与えられたと言える。



ルターが聖書を翻訳したヴァルトブルク城のルターの部屋

二〇一八年

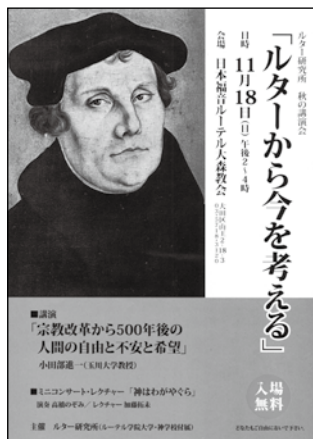
秋の講演会 報告

所員 宮本 新

今年も秋の講演会が開催されました。

テーマは「ルターから今を考える」(十一月八日、会場日本福音ルーテル大森教会)。ルター研究所の企画なので当然ながらルターに関連した講演会ですが、今回はその取り上げ方に様々な切り口があることを思わせる講演会となりました。第一部の基調講演では、『ルターから今を考える』宗教改革五〇〇年の記憶と想起(日本キリスト教団出版局、二〇一六年)の著者小田部進一先生(玉川大学)を迎えて、ルターと現代をめぐる心に響く講演をいただきました。「いかに死ぬかを問うとき、いかに生きるかが問われる」(著者あとがき)をメッセージとして、アイスレーベン(最後の場所)、ヴィッテンベルク(神のことばとの出会いの場所)、ヴァルトブルク(聖書を自分の言葉で読んだ場所)といったルターゆかりの地に親しめる。ご本でしたが、当日の講演もまたルターの足跡とその言葉を通して、私たち自身の歩み(時と場所)を思いめぐらせる機会となりました。講演題は「宗教改革から五〇〇年後の人間の自由と不安と希望」。とりわけ、希望の想起をめぐるルターのことばは力強いものがありました。

第二部はルターのコラール「われわれの神こそ堅い砦(教会讚美歌四五〇番)」を中心にしたコンサート(演奏 高橋のぞみ氏、JELC 東京教会)とレクチャー(加藤拓未氏、JELC 大森教会)。レクチャーでは、詩編四六篇の内容に沿っているのは第一〜三節まで、第四節だけがルター自身の「自由詩」になっっていることをうかがいました。「ふさぎ虫」こと不安な人ルターは不安に繋がれた自由ではなく、神のことばにつながれた自由を見出し、この讚美歌を作ったというエピソードには、なるほどと思われました。そして「かみはわがやぐら」の演奏と合唱。学び、聴き、歌う。恵みのひと時であり、教会を場所にして幸いを思いました。そのため大森教会には全面的な協力をいただきました。感謝！



ルターと聖書 — 私の研究ノートから①

混乱のときにあつて福音を語る

— 一五二二〜二三年のペトロの説教におけるルターの聖書解釈と第二世代の宗教改革者たちによる受容 —

高村 敏浩

私の一番の関心は、「聖書解釈の歴史」である。

二〇世紀の半ば過ぎまで、研究者たちはマルティン・ルターを、その独自性のゆえに中世の聖書解釈者たちから完全に独立した存在であると捉える傾向にあつた。しかし、ルターは実際には、彼に先行する時代、また同時代の聖書解釈者らと対話することによって聖書を読み、理解した聖書解釈者であつた。対話はもっぱら書かれたものや出版されたものを通して行われた。私の研究は、ルターを一五二二年の歴史的・社会的・文化的文脈の中に位置づけ、何がルター独自のものであり、何がルターの先達に属するものであるかを見究めようとする試みである。同時に、ルターが第二世代のルター派の宗教改革者たちにどのような影響を与えたのかということを検証する。

研究では、マルティン・ルターが一五二二〜二三年に行つた『ペトロの手紙一』の説教を主に扱う。一五二二年、ルターはヴァルトブルク城に身を隠し、そこで新約聖書の翻訳を行つた。しかしその留守中、ヴィッテンベルクに深刻な騒動が持ち上がり、ルターはその解決の

ために帰還する。『ペトロの手紙一』説教集は、騒動が収束した後に行つたものである。それ以前も日課などに沿つた説教は行つていたが、聖書の一つの文書を丸々扱つたものとしては、この『ペトロの手紙一』が帰還後最初のものではあつた。説教と言つても、実際には講解として編集・出版されたもので、どこからどこまでが一つの説教なのかということもはつきりしない。しかし、連続した講解説教であるため、ルターが一五二二年に何を考へていたかということを利用して解するのは比較的容易である。ルターは先達や同時代人たちと、彼らの書いた聖書講解などを通して交流した。また、次の世代のルター派の牧師や神学者たちとは、彼が書いたものを通して交流する。研究では、前者はルターが使つた可能性の高い『グロツサ・オーデイナリア』やリュラのニコラス、ロツテルダムのエラスムスなどを、後者は一五六〇年代に出版されたニールス・ヘミングセン、ウィクトリヌス・ストリーゲル、ヒエロニムス・ヴェラー、ニコラウス・ゼルネツカーの『ペトロの手紙一』説教集や註解・講解を検証する。

騒動が持ち上がり、ルターはその解決の

六面へ続く

シリーズ「人間ルター」⑩

翻訳する人ルター

所員
高井保雄



中川浩之・画

ルターは、実に多くの宗教改革的業績を残したが、中でも世界的影響を後世に及ぼしたものに「ルター訳聖書」がある。

ルター以前にも聖書のドイツ語訳は存在していたのだが、それらはラテン語訳からの重訳だった。ルターが初めて新旧両約聖書をそれぞれギリシャ語、ヘブライ語の原典から翻訳した。この事の学問的意義は巨大だが、特筆すべきは、彼の平易で生き生きとした訳文により、聖書が一部知識人の所有から、学校制度も無い時代にあつて広く一般大衆の所有となった点だ。ルター訳聖書は、その後のドイツの国民と文学発展の基礎となったと言われている。

ルター訳聖書で最も大きな議論となったのがローマ三・二八の訳だ。彼は「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰のみによるのである」とパウロの本文には存在しない言葉を付加した。この事が大きな議論を引き起こした。

果たして神の言葉である聖書の本文に存在しない言葉が付加されて良いのか？

ルターは大胆に主張する。この箇所訳はドイツ語の用法や語感からだけでなく、パウロの意図が力づくでこれを要求し、強制しているのだ。なぜならパウロはここでキリスト教教理の主要部分、即ち人は信仰によって律法の全てのわざ無しに義とされることに言及しているからである、と。

こうしてこの箇所は、ルターの「信仰のみ」、「信仰義認」の教説の一大根拠となったのだが、この問題は、聖書の翻訳とは単なる言語の問題ではなく、翻訳者の聖書理解、信仰、ひいては訳者の神学が問われる事柄であることを示すこととなった。

今日ではドイツにおいても次々と新しい聖書の翻訳がなされているが、その中であつて、尚ルター訳聖書が人々に愛されている。翻訳者ルターの面目躍如である。

ルターこぼれ話

「ルターとキケロ」

所長 江口再起



キケロ像
切り絵・竹田孝一

十数年前、キケロの『老年論』を読んだ。あまりピンとこなかった。今年になって再び読んでみた。ピンときた。赤線だらけになった。なぜか。私が老年になったからである。何事も経験してみなければ、本当にはわからぬものである。

キケロは、前一世紀のローマの政治家にして哲学者。カエサルやアウグストゥスとの政争に敗れ、六三歳で刺殺された。しかし、その学識は並ぶ者がなく、ラテン語の模範とされた。

さて、ルターである。彼は六二歳で亡くなるが、その前日に書かれた遺言メモは、こう記されていた。「五年間、農夫をやってみなければ、ヴェルギリウスの農耕歌は理解できまい。四〇年間、支配の地位に就いてみなければ、キケロの政治書簡は理解できない。百年間、預言者と共に教会を導いたのでなければ、聖書を十分に味わったとは思えまい。私たちは神の乞食、本当にそうだ」。

ルターはキケロをよく理解できたにちがいない。ルターも改革に伴う政治争いに翻弄されていたからである。自らの経験を通してこそ初めてわかることがある。聖書の深い世界も、きっとそうであろう。

晩年のキケロと、晩年のルター。キケロの『老年論』を読むと人が生まれ老い死ぬことは「自然」なことだと書いてある。ルターは、どうか。神にすべてを委ねて死ぬ（神の乞食！）。ルターとキケロは結局、同じことを語っているようにも思えるのだが……。

ルター研究者・名著シリーズ

ブラジルの神学者 V・ウエッセーレ

所員 宮本 新

ルターには論争家としての顔と教育者としての顔が見られるが、双方を併せ持っている人は珍しいことのように思う。すぐれて論争的な教育者というの、またすぐれて教育的な論争家というの、実際には稀有なことであるからだ。ヴィクトール・ウエッセーレ (Victor Wethelle 1952-2018) とはそのような稀有な神学者にあたる。

ウエッセーレは一九五二年にブラジル生れた。ブラジル・ルーテル教会で牧会をしていたが、一九九三年からカール・ブラーテンの後任としてシカゴ・ルーテル神学校の組織神学部門の教授として本格的な神学活動を開始している。P・ティリッヒ・C・ブラーテンの継承として見るのも興味深い、ウエッセーレの神学とそのインパクトを要約するのは容易ではない。ただルター神学を現代に紹介する、という調子ではなく、むしろ現代思想と対決させながら、論争的で、しかも相当なスピード感を持って事柄が論じられているからだ。シカゴの神学者といっても、ヨーロッパ、アフリカ、インド、中南米などの神学校や大学で教え続け、彼のゼミナールは多言語、多文化であることが常であった。学位論文はル

ターとヘーゲルであったが、ルター研究と結びついた現代思想や学際的な広がりは無尽蔵で、ポストコロニアル理論やジェンダー理論、またインドの宗教哲学や文芸批評からも学び、牧会をしていたブラジルはじめ中・南米では解放の神学を脈絡として刺激的な発言をつづけていた。その著作は単著だけで英語、ポルトガル語、スペイン語で一六冊ある。いくつもの雑誌の編者も務め共著や論文はかぞえきれない。「ルター」という神学資源がどれほどに広がりがあり、また深いものであるか、そして人間の叡智と批判的に切り結ばれていくものなのか、その可能性とスピード感をウエッセーレから学んだ人は少なくない。

しかしウエッセーレが「教会の神学者」であったこともまた見逃せない。説教者として生涯教会に仕え、教会の可能性と使命が関心の中心にあった。主著 *The Scandalous God: the Use and Abuse of the Cross* では「十字架の神学」を論じ、つづけて教会論を論じた *The Church Event: Call and Challenge of a Church Protestant* は、ウエッセーレが単に学問の人ではなく、使徒的であろうとした人であった証言にもなっている。

ルターのことば

多田 哲

今や世界は御言を軽視していることを気にもせず
歩んでいるのである。 [TR 2, 2780b] (卓上語録)

ルターは御言の軽視を最も邪悪な災いであると語っています。この世に起こる様々な出来事に対して、どのような言葉を選んでも的確に言い表せないもどかしさを感じる時があります。言葉は時代とともに変化し、尊いとされていた言葉もやがて使い古されて廃れていきます。それでも人は自分の思考や感情を表現するために新しい言葉を生み出し、何とかこの世界の出来事を把握しようと努めます。「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」(ヨハネによる福音書1章3節)と書いてある通り、私たちは世界を言語化することで認識し、言語によって思惟することで世界に応答することができます。しかし、今、言葉の力なさを感じます。フクシマを経験してもなお神の創造の御業を侮るように推し進められる核開発、神の救いの御業を蔑ろにするように広がる差別と排斥、そして戦争、それらに責任を託された人々の言葉は嘘と欺瞞に満

ちています。それに対して声を上げる人々の声も虚しくされています。私たちは一体ここで何を語るのでしょうか。SNSの発達で誰もが簡単に自分の言葉で発信することができるようになりましたが、かつてない速さで言葉が生まれては消えていき、言葉が使い捨てにされています。私たちはこうして多くの言葉を失い、自分の思考や感情を言葉で言い表すことができず、代わりに行動で表現することを余儀なくされます。それがますます言葉の力を失わせるという悪循環を生じさせるのです。聖書の言葉が何の役に立つのか、祈りの言葉が何の助けになるのか、それより具体的な行動をして、実際の助けをした方が世のため人のためになるという批判が教会の内外から聞かれます。もしも、私たちが言葉を失ったら、私たちは神を失うことになります。神を失うならば、命も失います。

(JELC 日吉ルーテル教会 牧師)

私のルター研究 — 「福音」を問う

所員 石居 基夫

二〇一七年、宗教改革五〇〇年は、世界的にも、また日本においても、ルーテル教会はカトリック教会との共同記念という、これまでにはおそらく考えられもしなかった形でこの時を記念した。色々な意味で、ルターの宗教改革が現代世界の中で改めて問い直されているといつて良いだろう。

宗教改革の中心は、「福音の理解」であった。キリストによる救いの出来事が、時代の中で確かに人々に伝わるものとなっているのか。ただその一点で、ルターは当時の教会、そして世界のあり方を問い直したということだ。だとするならば、今、私たちは信仰とか教会、教派のあり方にとどまらず、むしろ現代世界そのもののあり方をキリストの福音によって問い直すことが求められているように思っている。

そういう意味で、私のルター研究の筋道は、「福音とは何か」ということを深く問い続けることを軸としながら、一つには現代世界とは何か、二つ目に日本とは何かという問題を設定している。つまり、現代の日本に生きる私たちにとって、福音はなぜ「救い」であるのか、何をもち

らすのか、という問いなのである。

ポスト三・一一を生きる私たちは、福音へ招かれつつ、この福音を宣べ伝えるようにと派遣されてもいる。人間の文明、日本の思想や宗教、社会のあり方を問うことは、私たち人間をとらえる罪や悪を深く自覚していくということなのだろう。その罪人である私たちに、キリストが伝えられ、それによって新たに生かされていく希望と喜びがある。その福音を分かち合うための「ことば」を紡いでいかなければならない。



キリスト新聞社 2016

三面から続く

研究が明らかにするのは、ルターが確かに独自性を発揮しつつも、教会の聖書解釈者の系譜になお確かに連なっているということである。

(JELC 三鷹ルーテル教会 牧師)

切手に見るルター ⑳

緊急通貨のルター

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一



「ルター新聞」の特集「ルターと聖書」に鑑み、三度ルター訳聖書を取り上げる。今回は趣向を変えてノートゲルト（緊急通貨）に描かれたルターを紹介したい。1918年に第一次世界大戦の敗戦国となったドイツでは、戦後猛烈なインフレ（ハイパーインフレと呼ばれる）に襲われ、通貨制度が大混乱が起きた。その際国内各地で地域限定通用の緊急紙幣が発行され、短期間使用された。

アイゼナハでは1921年に額面50ペニヒ6種の緊急紙幣が発行され、すべてアイゼナハやヴァルトブルク城におけるルターが絵柄となっている。紹介する1枚にはヴァルトブルク城で新約聖書を翻訳中のルターが描かれ、上段に「神はわがやぐら」、下段に「新約聖書を翻訳するユンカー・エルク（ルターの偽名）」とある。裏面（表面？）にはアイゼナハ市街とヴァルトブルク城が描かれ、1521年5月4日にルターが入城したと記し、400年記念発行を示唆する。経済的混乱下でもルターの節目の年にこだわっているのである。

ヴィッテンベルクでも1922年6種の緊急紙幣が発行され、ルターの各肖像とルターハレ（ルターの家）が絵柄となっている。こちらもヴィッテンベルクにとってはルター節目の年である。

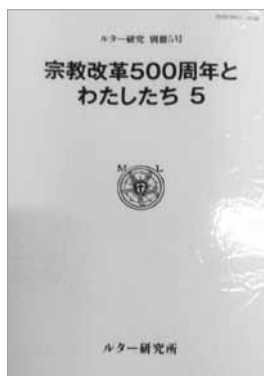
本の紹介

『ルター研究 別冊5号』

ルター研究所 リトン 2018.10 2,000円 + 税

『ルターの脱構築』

江口再起 リトン 2018.11 1,500円 + 税



2冊の本を紹介します。1冊目は、ルター研究所の紀要論文集『ルター研究 別冊5号(宗教改革500周年とわたしたち5)』です。500年を機に所員が、それぞれの関心に基づきルターを論じた論文集。石居基夫「ルターにおける「律法と福音」、その重層的構造」は、「信仰義認」や「十字架の神学」と並んでルター神学を特徴づける「律法と福音」概念をていねいに論じていく。立山忠浩「今日的課題としての「ルターと聖書」」は、建前ではなく本当に聖書を精読することの大切さを強調し、その中で聖餐問題に焦点を当てて論じている。宮本新「ルター

の十字架の神学」は、十字架の神学の今日的展開である。ホロコースト以後におけるこの神学の意味、そして更にアジア発の宇宙論的十字架の神学の紹介などなど。高井保雄「ルターを囲む人々とその時代風景」は、ルターの生涯と時代背景を精神分析家E. H. エリクソンなどを援用しつつ描き出している。江口再起「ルターの脱構築」については、後述参照。

特筆すべきは所員以外からの寄稿である。真下弥生「宗教改革と美術」は、クラーナハラの版画を論じ、また500年を記念してミネアポリス美術館等で開催された「マルティン・ルター展」を紹介している。加藤拓未「メンデルスゾーン交響曲第5番《宗教改革》」は、この交響曲の由来や聴きどころを解説してくれる。そして巻末に貴重な文書が翻訳紹介されている。ルーテル世界連盟・ルター派聖書解釈学研究文書「はじめに言があった—ルター派共同体における聖書」である。今日どのように聖書を読み解釈すべきか。そのためのルター派からの手引きと提案である(訳・安田真由子、解説・李明生)。500年を締め括る、総頁220頁の実に充実した一冊である。

2冊目の『ルターの脱構築—宗教改革500年とポスト近代』は、私が2017年の宗教改革500年前後にした講演や論文を集めたものです。「脱構築」とは、フランスの哲学者デリダの用語だが、本書が意図していることは、ルターを崇めたりただ守るのではなく、信仰や世界や人間のことを、ルターと共にそしてルターを越えて考えてゆこう、ということである。

大事な論点が二つある。一つは「恩寵義認」ということ。ルターが主張した「信仰義認」の教えが、救い(義認)は人間の信仰力(!)こそが決め手だと誤解されているゆえ、そうではなくむしろ「恩寵義認」と表現すべきと提案したのである。救いは、あくまで神の「恵みのみ」に由来する(「信仰のみ」は、その事への人間の側からの二次的な言い方である)。論点の第二は、「三つのE」。ギリシア語の「オイケオー(住む)」に語源をもつ三つの言葉、エコロジー、エコノミー、エキュメニズムこそが、私たち生きている今の時代(ポスト近代!)のキーワードであり、そうした事柄との関わりの中で、ルターについて考え学ぶことの大切さを論じた。三つのEのことを考えれば、今の時代は3.11以後の世界、つまりフクシマの時代である。そのことをおぼえて付論として「フクシマのモーツァルト」を収録した。読んでいただくと、ありがたい。

所長 江口 再起

ルター研究所助手を

させていだいて

日本ルーテル神学校 4年 筑田 仁

私は、一昨年の三月より今年の二月末までルター研究所の助手をさせて頂きました。神学校での学びと、ルター研究所の助手の働きを平行させていくのは時間的に忙しい時もありましたが、どの働きも私にとって良き経験となりました。ルター研究所の仕事は、ルター研究所所員会、ルターセミナーの開催、ルター新聞の発行、秋の講演会等多岐に渡っています。助手はそれらのどの仕事にも事務的な作業を中心に運営に関わらせていただきました。ルター研究所助手の仕事を終えるにあたり、私にとって一番印象に残っていることは全国に広がるルター研究所の賛助会員の方々の存在です。一年間沢山の会員の方々が貴い献金をして下さいました。そこにはルター研究所の働きを本当に支えて下さる心遣いとお祈りを感じてきました。全国の賛助会員の方々のお祈りによってルター研究所は活動できるのです。

この一年お世話になりました賛助会員の皆様方、ルター研究所所員の先生方、そして江口所長に感謝の言葉を述べさせて頂きたいと思えます。本当にありがとうございました。(筑田氏は、四月より、甲府・諏訪教会の牧師として働かれます)。

研究所ニュース

● 今年の研究所のテーマ

「五百年からの出発」を掲げて研究・教育活動をすすめる研究所の今年のテーマは、「ルターと聖書」です。一〇二面をご覧ください。

● 「秋の講演会」盛会のうちに終わる

昨年十一月十八日、「秋の講演会」が小田部進一先生(玉川大学教授)をお迎えして開かれました(大森教会)。三面をご覧ください。

● 「ルター研究(別冊五号)」発行

宗教改革五百年を記念して刊行してきた「ルター研究」の別冊シリーズは、今号をもって完結です(昨十月)。リトンド社、定価は二千円です。内容については、七面をご覧ください。

● 所員会での共同研究

原則として毎月一回開かれる所員会では、所員による研究発表や共同研究をし

ています。この間、日本ルーテル学会が出版した論文集『ルターと宗教改革(七号)』ルターの主要著作を読む』所収の全十五本の論文を検討しました。また一月には、R・E・ジェンソン『ルター派の標語―その使用と誤用』について高村敏浩牧師に紹介していただきました。

● ルター研究所の公開講座

二〇一九年度前期は「ルターの生涯」後期は「ルターの神学」が開かれます。いずれも江口所長が担当します(毎週火曜日四限目)。

● 献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金(二〇〇万円)と皆さんのご支援(およそ二五〇万円)で成り立っています。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金(ルター研)」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願い致します。(所長 江口再起)

牧師のためのルター・セミナー 主題 「ルターと聖書」

● 内容・プログラム

1. ルターの聖書解釈
2. ルターとカトリックの聖書理解
3. ルターの翻訳論
4. 聖書協会の新しい翻訳
5. ルターの「聖書序文」
6. その他

- 日時 2019年5月27日午後3時~29日 正午
- 場所 マホロバ・マイズ三浦(神奈川県三浦市)
- 費用 2万5千円くらい
- 申し込み方法 メール
ハガキ

なお研究発表等、どうぞお申し出ください。信徒の方の参加も歓迎。

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー〇一ー二〇

電話 〇四二二一三ー一四六一

発行責任: 江口 再起(所長)

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp